

令和元年6月7日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2018

課題番号：26301033

研究課題名(和文) 日系国際児のバイリテラシー形成過程の質的探究とその展開

研究課題名(英文) Qualitative Study on Biliteracy Developmental Processes among International Children

研究代表者

柴山 真琴 (SHIBAYAMA, Makoto)

大妻女子大学・家政学部・教授

研究者番号：40350566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、独日国際児とその家族を対象に、家庭でのバイリテラシー実践過程と独日国際児の日本語リテラシーの形成過程の特徴を解明した。対象家族(母親のドイツ語力は低いが母子間で日本語の会話と読み書き活動を実践している家族)の観察記録の質的分析から、夫婦間協働では自分の母語の宿題支援を担当する「言語別役割分担」を基本とする支援パターンが形成されていたこと、子どもが小学校高学年になると親子間協働が「親主導型」から「子ども主導型」へと変化したことを見出した。また、作文の縦断的分析から、独日国際児の日本語作文力の発達過程には、母語児には見られない二言語同時習得児ならではの特征があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、次の2点にある。第1点は、児童期に複数の言語で読み書きを習得する国際児のバイリテラシーの発達に、定期的かつ協働的な家族内実践に支えられていることを独日国際児の事例を通して具体的に開示したことである。第2点は、日本語を複数言語の1つとして習得する児童の作文力の発達過程は、日本語母語児とは違う道筋を辿ることをドイツ語を優勢言語とする児童の例に基づいて具体的に示したことである。これらの知見は、これまでほとんど未解明であった日系国際児の継承日本語リテラシーの伸び方に関する基礎資料となり、日本語補習校における作文指導の改善という実践的課題にも貢献し得るものである。

研究成果の概要(英文)：This study revealed some characteristics of biliteracy practice among German-Japanese families and that of Japanese literacy development among German-Japanese children. Qualitative analysis of the diary records which the Japanese mothers wrote, revealed followings: 1) the child's German father assisted him with homework from his local school, and his Japanese mother assisted him with his homework from the Japanese supplementary school, 2) parent-child collaboration shifted from "parent-led type" to "child-led type" when the child became upper grade. Longitudinal analysis of the writing of German-Japanese children revealed that their Japanese writing ability development process was similar to that of Japanese native children. Whereas it has also featured the uniqueness of bilingual children that cannot be found in native children.

研究分野：発達心理学

キーワード：バイリテラシー 日系国際児 同時バイリンガル 質的研究 継承語としての日本語 日本語作文力

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

二言語での読み書き力(以下、バイリテラシー)の形成を目指す子どもの中でも、国際結婚家族の子ども(以下、国際児)は、二言語で高度な読み書き力を形成する上で困難が大きいと言われている。父親あるいは母親の母国に居住して現地校に通う国際児の場合、家庭での母語使用が多い移民・外国人児童と比べると継承語での読み書き力を伸ばしにくく、他方で語彙力・産出力が飛躍的に伸びる母語児並みに現地語力を習得するのも決して容易ではないからである。日本語を継承語として学習する日系国際児のバイリテラシーに関しては、1)現地語力(英語力)が高い一方で、小4以降に日本語力が二分化する傾向があること、2)日本語力のばらつきの背景には両親の二言語力や幼少時からの家庭での取り組みの違いが関係していることが指摘されていたが、家族の二言語実践過程についてはほとんど未解明であり、我々が実施した研究(H22-25年度科研費研究。以下、第 期研究)以外にはほとんど見当たらなかった。

2. 研究の目的

本研究(必要に応じて「第 期研究」を使用)の目的は、バイリテラシー形成を目指す子どものうち、家庭環境的・学校制度的要因から見て、高度なバイリテラシーを形成する上で困難が大きい独日国際児を対象に、幼児期・児童期におけるバイリテラシー形成過程の更なる解明を進めることである。具体的には、以下の2つの課題を設定した。

【課題1】バイリテラシー形成に至る複線的な道筋と協働の解明

第 期研究では、子どものバイリテラシー形成への寄与因を踏まえて、母親の現地語力が高く、母子間での日本語使用と日本語を使った読み書き実践への定期的な参加が行われている家族を対象にしたが、国際家族の状況(特に母親の現地語力)には多様性が見られた。そこで第 期研究では、母親のドイツ語力が低い場合の家族内二言語実践過程の特徴を明らかにし、さらに第 期研究の対象家族との比較検討を通して、母親の条件を超えた家族間協働の多様性に通底する基本過程を取り出すことを目的とした。

【課題2】継承語としての日本語リテラシー形成過程の特徴の解明

第 期研究では二言語で使用し得る作文課題(「物語文課題」と「説明文課題」)を独自に開発した。対象児がこれらの課題で書いた日本語作文の分析から、「表現手段の相対的少なさ」「不適切な表現」という特徴が見出されたが、参照する日本語母語児のデータがないことから、それがバイリンガル児固有の特徴(ドイツ語からの干渉的特徴)なのか、単にこの年齢の日本語作文の特徴を反映したものにすぎないのかを見極めることが難しかった。そこで第 期研究では、同一作文課題を日本語母語児(小学生)と対象児が通う日本語補習授業校(以下、補習校)の児童生徒に実施することにより、独日国際児の日本語リテラシー形成過程の特徴を書く力(作文力)に着目して明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

(1)研究方法論

本研究で採用した研究方法論には、次の2つの特徴がある。第一の特徴は、国際児のバイリテラシー形成過程を<日常実践に基礎を置く協働的・解釈的過程>として探究する質的アプローチを採用したことである。従来、子どもの個人的な認知活動と見なされがちであった二言語習得を「親子の共同行為」として捉え直すことで、バイリテラシーの社会的構成過程を解明しようとした点に本研究の理論的特徴がある。第二の特徴は、国際家族の日常実践における協働的・解釈的過程を捉えるための手法として、親による行動観察、家族の行動文脈を理解するためのフィールドワーク、二言語検査(作文も含む)、を組み合わせた包括的・多角的方法を採用

したことである。従来の二言語習得研究では、質問紙調査・言語力測定・面接調査が中心であったが、二言語に媒介されて子ども・家族関係・実践が解釈的・関係的に変容していく様相を具体的に把握しようとした点に本研究の方法論的特徴がある。

(2) 研究対象とデータ収集法・分析法

1) 【課題 1】を解明するための家族の事例調査

研究対象：本研究では、先行研究の検討から示唆されたバイリテラシー形成上の重要な年齢（幼稚園入園を経験する 3 歳頃、小学校入学を経験する 6 歳頃、小学校中学年に進級する 8,9 歳頃）に相当する子どもがいる独日国際家族を対象にした。さらに第 1 期研究では、子どものバイリテラシー形成に有利な条件((a)母親の高ドイツ語力、(b)母子間での日本語使用、(c)親子での読み書き活動への定期的な参加)のうち、(a)の条件だけを「母親の低ドイツ語力」に変えて、それに該当する家族(3 家族)を選定した。

データ収集法・分析法：親による行動記録法として「日誌法」を採用し、第 1 期研究時に作成した記録様式を用いて対象家族の日本人母親に定期的に観察記録を書いてもらった。分析においては、観察記録からエピソードを抽出し質的な分析を行った。

2) 【課題 2】を解明するための作文調査

研究対象：小学生の作文力の発達においては、学校教育で行われる作文教育の影響も大きいと予想されたことから、児童期の書く力の発達過程を捉える上で重要と判断された時期(小 2・小 4・小 6 の 3 つの学年)の児童を対象とした。

データ収集法・分析法：日本の「小学校学習指導要領」と「指導書」およびドイツ現地校の「学習指導要領」の検討を踏まえ、「物語文」と「説明文」の 2 つのジャンルを選定した。これに対応する作文課題として、「物語文課題」と「説明文課題」を独自に作成し、この 2 つの課題を用いて対象児に作文を書いてもらった。また、第 1 期研究では、児童の作文を総合的に評価するための「作文評価指標」(文字・表記・単語、構文、談話、の 3 つの次元から構成)も独自に開発した。この評価指標は 3 つのレベルに応じて最適な分析手法を構築し、談話レベルの分析においては、「学習指導要領」の評価基準に準拠したルーブリックを作成した。日本語母語児については、小 2・小 4・小 6 の 3 つの学年の児童に作文を書いてもらい、横断的な分析を行った。また補習校通学児については、小 4・小 6 中 2 の 3 時点で、同一クラスの児童生徒に作文を書いてもらい、縦断的な分析を行った。

4 . 研究成果

本研究で収集したデータの一部は分析途中であるが、現時点までに得られた本研究の主要な研究成果は、以下のように整理できる。

(1) 【課題 1】に関する研究成果

1) 家族(母親)の条件の違いと家族間協働

第 1 期研究では、母親のドイツ語力が低い家族を対象に家族間協働の特徴を検討したところ、次の 2 点が明らかになった。第一に、父母間協働では、子どもの学年に拘らず、自分が母語とする言語の宿題を支援する「言語別役割分担」を基本とする支援パターンが形成されていた。第二に、この言語別役割分担は、宿題をめぐる親子間調整の基本単位ともなっていた。特に小学校高学年から中学生に移行した子どもがいる家族の場合、現地校宿題をめぐる父子間調整は円滑に進んでいたが、補習校宿題をめぐる母子間調整では対立が頻発していた。

他方で、子どもの学年によらず、家族間協働に共通に見られる特徴もあった。すなわち、対

象家族の二言語実践は、家族によって多様であったが、どの家族の実践過程も<言語環境的・学校制度的要因と家族の状況に規定されつつ、夫婦間・親子間の絶えざる調整によって、親による支援の組み直しと子どもの変容が共起する漸進的な過程>であることを見出すことができた。これは第一期研究でも同様に見出された過程であり、家族の条件(母親のドイツ語力の違い)を超えて、家族間協働に通底する共通の基本過程であると考えられた。

2) 子どもの発達段階と家族間協働

第一期研究からは、子どもが小学校低学年のうち、現地校・補習校の宿題は親の監督と支援の下で比較的順調に進みやすいが、子どもが中学年になる頃から、補習校の宿題支援過程で親子間の対立が生じ始めることが確認されていた。第一期研究では、高学年児のいる対象家族の二言語実践過程を質的に分析した結果、宿題遂行場面における親子間調整は「親主導型」から「子ども主導型」へと変化したことが明らかになった。こうした親子間協働の移行は、読書場面でも確認された。

3) 対象児自身の調整過程の特徴

宿題遂行場面における対象児(高学年児)の調整過程の分析から、子どもが現地校と補習校の宿題に取り組む背後では、現地校と補習校の関係、現地校と友達の関係、自分の将来との関係など、子ども自身が自分が生きる生態学的環境に対する理解を深め、自らの生態学的環境に対する認知(以下、環境認知)と関係づけて眼前の宿題を意味づけつつ調整していることがわかった。具体的には、現地校宿題場面では、現地校からの組織的支援・圧力や同輩集団からの刺激を受けながら、対象児の環境認知は拡大・深化していたのに対して、補習校宿題場面では、制度的な支えも同輩集団からの刺激も弱い自助努力に任された状況下で、対象児の環境認知は限定的になりがちであった。有能感を漸増させながらドイツ語を現在・将来の自分にとっての中核言語として位置づけ学業達成に専心する自己誘導も、不全感を覚えつつ現在・将来の自分にとっての日本語学習の意味を模索する揺れも、環境認知との絶え間ない対話の産物と考えられた。

また、同対象児の読書場面の分析からは、ドイツ語・日本語・英語での読書活動は次の2段階を辿って進んでいることが明らかになった。

第一段階: 現地校(中学校)での成績評価の圧力の強まりを受け、親が価値づけを修正して(学業成績に関係しない日本語よりもドイツ語の読書を優先する)、子どものドイツ語読書を支援する段階。ちょうどこの時期に読書活動においても友人との交流が活発化し、対象児は読書の楽しさを経験するようになり、継続的な読書活動を行うようになった。

第二段階: 子ども自身が複数言語の読書を自律的に選択・調整する段階。第二段階への移行過程は、自身の将来展望における各言語の意味づけ、親からの自立、認知的発達と自分の言語能力をモニターする意識、という3側面での発達に支えられていることがわかった。成績に関係しない日本語の読書は、現地校の学業成績に関係するドイツ語や英語の読書に比べるとドイツの日常生活の中では縮小されたものの、日本訪問時の他者との関係や日本への愛着に支えられて揺れを伴いつつ実践されていた。

(2) 【課題2】に関する研究成果

1) 補習校通学児に見られる日本語作文力の発達過程の特徴

補習校通学児の小4・小6の作文の縦断的分析を通して、以下の3点が明らかになった。

第一に、補習校児の書く力の発達過程は、文字・表記・単語/構文/談話の3つのレベルで、母語児の発達過程とよく似ていたが、相対的に伸び方が緩やかで伸び幅も小さかった。具体的には、「物語文課題」作文でも「説明文課題」作文でも、1つの作文を書く際に使う文の数(ただし

説明文では MLU が短い)やタイプ(単語の種類)については、母語児とそれほど変わらず、2 年間で大きく伸びていた。また、文字数・漢字数、構文や副詞節・連体節などの使用数においても着実に伸びていたが、その伸び幅が母語児に比べると小さかった。

第二に、補習校児の場合、長い文章や複文を書こうとすると形式段落を作らなかつたり、言葉の不適切な使用や助詞・文字表記の間違いなどが生じたりする傾向があった。特に「物語文課題」作文でも「説明文課題」作文でも、母語児に比べると構成する形式段落の数が少ないことが、文字・表記・単語レベルの分析でも談話レベルの分析でも確認された。また、平がな・片かな・漢字表記の誤りなどが、学年と共に増えていく傾向があった。

第三に、作文のジャンルにより、作文力の伸び方に違いが見られた。「物語文課題」作文では 2 年間で順調な伸びを見せたのに対して、「説明文課題」作文では 2 年間の伸びが小さいなど、作文のジャンルによって書く力の伸び方が異なっていた(この傾向は母語児にも見られた)。児童期の子どもにとって、幼少時から馴染みのある物語文の方が、学校での活動など限定された場面で使う説明文に比べると、より早い学年で上手に構成されやすいことが示唆された。

2)事例研究の独日国際児に見られる日本語作文力の発達過程の特徴

対象家族の子ども一人である独日国際児が小 4 から中 3 までに書いた 2 種類の日本語作文(「物語文課題」作文と「説明文課題」作文)を分析した結果、以下の点が明らかになった。対象児は、産出量・語彙や構文のバリエーションなどの面では、日本語母語児に比べると伸びが緩やかであったが、談話レベルでは母語児に近い作文を書いており、優勢なドイツ語に牽引されるように日本語が伸びていることがわかった。具体的には、まず接続表現や構文が複雑になることで、論理的なつながりが改善され、それに続いて作文の全体構成や内容が高度なものになっていくという道筋があるらしいことがわかった。他方で、ドイツ語作文に近いレベルで日本語作文を書こうとすると、日本語の表現手段が限られているために文法的な誤用が生じたり、漢字熟語の不足により不自然な表現が出現したりする特徴も見出せた。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 5 件)

- [1] ビアルケ(當山)千咲・柴山真琴・池上摩希子・高橋登 「複数言語環境に育つ子どもはどのように読書活動を実践してゆくのか：社会的環境とのかかわりと言語をめぐる意識の変化に注目して」日本質的心理学会誌『質的心理学研究』第 19 号 (掲載確定) 2020 (査読有)
- [2] ビアルケ(當山)千咲・柴山真琴・高橋登・池上摩希子 「継承日本語学習児における二言語の作文力の発達過程：ドイツの補習校に通う独日国際児の事例から」日本語教育学会誌『日本語教育』第 172 号, 102-117, 2019 (査読有)
- [3] 柴山真琴・高橋登・池上摩希子・ビアルケ(當山)千咲 「ドイツ居住のバイリンガル小学生の日本語作文力：日本語補習授業校通学児の 2 年間の縦断的調査に基づいて」大妻女子大学人間生活文化研究所誌『人間生活文化研究』第 27 巻, 682-696, 2017 (査読無)
- [4] 柴山真琴 「質的研究の計画 - 実行 - 報告における質の検討」日本保育学会誌『保育学研究』第 55 巻第 3 号, 106-111, 2017 (査読無)
- [5] 柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子 「子どもの言語習得とグローバル化時代のインターフェース：海外居住の国際家族におけるバイリテラシー実践を手がかりに」日本発達心理学会誌『発達心理学研究』第 27 巻第 4 号, 357-367, 2016 (査読有)

[学会発表](計 5 件)

- [1] 柴山真琴 「体験から学ぶエスノグラフィー」日本質的心理学会・研究交流委員会研修会, 2019 年 3 月 3 日. (招待講演)

- [2] 柴山真琴・高橋登・池上摩希子・ピアルケ(當山)千咲 「子どもの二言語力を育てるために」
ミュンヘン日本語補習授業校講演会, 2018年10月12日. (共同講演)
- [3] 柴山真琴 「エスノグラフィーを学ぶ」 異文化間教育学会・若手交流委員会「研究法セミナー」
2017年10月1日. (招待講演)
- [4] 柴山真琴 「エスノグラフィー研究の視点から」日本質的心理学会第14回大会企画シンポジウム「質的研究評価基準への展望」, 『日本質的心理学会第14回大会 in 東京 プログラム抄録集』 pp.12-13, 2017年9月10日.
- [5] 柴山真琴 「国際児の二言語での萌芽的読み書き行動と保育支援」日本発達心理学会第27回大会ラウンドテーブル「多文化保育から子どもの発達を考える」 『日本発達心理学会第27回大会論文集』 p.133, 2016年5月1日.
- [図書](計 2 件)
- [1] 柴山真琴 「文化人類学・文化社会学からの示唆」(20章) 田島信元・岩立志津夫・長崎勤(編) 『新・発達心理学ハンドブック』福村出版, pp.232-240, 2016年7月.
- [2] 柴山真琴 「エスノグラフィ」(第2章2節) 佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健(編) 『異文化間教育のフロンティア』(「異文化間教育学体系」第4巻) 明石書店, pp.45-57, 2016年6月.
- [その他](計 1 件)
- [1] 柴山真琴 「幼児の異文化体験」 海外子女教育, 第554号, pp.19-21, 2019年4月.

ホームページ等：大妻女子大学ホームページ / 研究助成情報
<http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/jyosei/modules/saitaku/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：高橋 登

ローマ字氏名：TAKAHASHI, Noboru

所属研究機関名：大阪教育大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：00188038

研究分担者氏名：池上 摩希子

ローマ字氏名：IKEGAMI, Makiko

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：大学院日本語教育研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：80409721

研究分担者氏名：ピアルケ(當山) 千咲 (2014-2016年度:研究協力者、2017-2018年度:研究分担者)

ローマ字氏名：TOYAMA-BIALKE, Chisaki

所属研究機関名：東京経済大学

部局名：経営学部

職名：特任講師

研究者番号(8桁)：70407188

(2) 研究協力者 (なし)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。